

国際学会報告

Konzepte des Subjekts und Konzepte der Subjektivität: 1800/1900

29.-31. August 2013 in Bielefeld

土屋京子

今夏、8月29日から31日にかけて、ドイツ・ビーレフェルト大学の Zentrum für interdisziplinäre Forschung (ZiF) において、同大学の Wolfgang Braungart 教授を中心に、文学・言語学科主催の国際学会が開催された。ここでは全体テーマ „Konzepte des Subjekts und Konzepte der Subjektivität: 1800/1900“ をめぐって、ビーレフェルト大学と協定を結んでいる中国、インド、そして日本の大学から招聘された学者たちが一堂に会することで、親密な雰囲気の中、発展的な議論が交わされた。



いまでもして近代的自我が問題になるのか。近現代社会の前提となっている、私たちの「自己」を構成しているように思われる「アイデンティティをもった主体としての自我」については、日本でもさまざまな分野を横断しつつ論じられてすでに久しい。しかし、この国際学会の開催の直接的なきっかけになったのは、2012年の2月28、29日に、新潟大学でおこなわれた国際シンポジウム „Das Krisenbewusstsein zur Zeit der Romantik und Utopievorstellung“ において、Braungart 教授が率いるドイツ語圏の学者と、新潟大学の桑原聡教授を中心とした日本人学者とのあいだでおこなわれた議論であった。新潟大学で開催された国際シンポジウムに関しては、すでに『19世紀学研究』第7号（2013年）のなかでまとめられているため、ここではその議論の概要に触れておく。桑原教授と Braungart 教授とのあいだで共通の立脚点となったのは、ロマン派の意義とは、われわれの生きている世界がいまなお克服することのできていない「近代」と衝突し、そしてそれと対峙したというところにある、という見解であった。「近代」の問題とは、すなわち主体の問題である。ドイツ語圏の研究者が、18世紀以降に確立された「主体」あ

るいは「主体性」を、人間の規範意識として理解し、あらゆる芸術の根幹を形成するものであると価値づけたのに対し、日本の陣営はあらゆるものを根拠づける「自律的主体」というものにやや懐疑を示した。さらには、「自我」を犠牲にしてもたらされた神秘的忘我のうちに、靈感の光明が射し込み、あらたな「私」を見いだすというユートピアの描写が、近代以降のドイツ語圏のテキストにもみられると反駁したのだった。このような議論が、18世紀、19世紀のドイツ語圏のテキストを基軸にして、西欧と東洋の「主体」解釈の異同を明るみに出すという、今回の国際学会の共通テーマとして成就したのだった。

私が桑原教授からこの国際学会の話聞いたのは、2013年2月21日、博士論文の口頭試問の翌日であった。啓蒙主義とロマン主義とを理解するさいに踏襲されてきた二項対立の枠組みを揺り動かすこと、それは書き上げたばかりの博士論文の執筆動機であった。西欧近代において形成された「私」は、啓蒙主義とロマン主義を架ける橋の基柱である。それゆえに、近代において見いだされた「私」をどのように読むか、それは「啓蒙主義」という近代の思想体系を総じてどのように捉えるのかという、ロマン主義研究者としてのひとつの重要な態度表明ではないか、桑原教授とのあいだでメールの往復をするうちにそのように考え及んだ。また、ホフマンの文学を中心にして「主体」や「主体性」について論じるということ、それは私のようにホフマンをながく読みつけてきた者にとっては宿命ともいえる。あらためていうまでもないかもしれないが、ホフマンは、分身や狂気、また磁気療法による人格操作など、自我の分裂や忘我、あるいは異質の自我がみずからのなかで生まれるという心理体験を文学の主題にした作家として知られている。ホフマン研究の最前線は、常にここをめぐると言っても過言ではないだろう。博士論文を執筆後に、ホフマン研究者としてのひとつのけじめとなり、またロマン主義研究者としての第一歩ともなる、このようなテーマを論じる場を与えていただき、研究者冥利に尽きる幸せなことであると、桑原教授の話はひとつ返事で受けさせていただいた。しかし、このテーマに真っ向から取り組んで、私が見いだすことのできる新しい視点とはいったいなにか。この不安は原稿を書きあげてからも払拭することはできず、じっさいに発表を終えるまではほとんど絶望さえ感じていた。

さて、国際学会の初日は、Braungart 教授の本会のコンセプトを伝える講演にも似た開会挨拶のあと、桑原教授の „Jenseits des Subjekts – Wiedervereinigung vom Weiblichen und Männlichen als ein ‚anderes Wissen‘“ という講演ではじまった。桑原教授は、ドイツ・ロマン主義にはじまって G. ジンメル、H. ブロッホ、R. ムーゼルなどのテキストを引用し、近代以降のドイツ文学における「主体」を超越しようとする試みの系譜を示しつつ、ドイツ語圏文化においても、主体性を越えようとする思想が脈々と流れていることを証明した。近代的主体である「私」という殻を壊すこと、それはこの題目にも明示されてあるように、男性性と女性性との緊張関係においてである。男性性と女性性は対置されてありながらも、共にある存在である。両者間における相

互的、双方向的な出会いと直接の触れあい、そして別離という反復運動のなかで、近代における「我」の絶対化が失効する。しかしそのさいに「我」は解消するのではなく、「あなた」との関係性のなかで、あらたに生まれてくるのではないか。このような主体のありかたが、近代以降のドイツ語圏の文学において、ひじょうに重要な場面で描かれていることが、この発表で明らかにされた。そしてさいごに桑原教授は、禅の無門關のひとつである、「風穴和尚、因僧問、語黙涉離微、如何通不犯。穴云、長憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香」を引用し、ことばと語りえぬものの緊張関係のあいだにある私／世界のありかたを受け入れること、そして意識化される「主体」とは別の自己認識の可能性に触れたうえで、ドイツ・ヨーロッパ文化圏とアジア文化圏において、「近代的主体」をテーマとする比較研究が今なお実り豊かなテーマになりうることをみずから開示してみせた。

桑原教授につづいて「主体」研究の権威である Manfred Frank 教授が、まさに今回の国際学会にふさわしい „Subjekt und Subjektivität“ という演題で講演をおこなった。カントからヘーゲル、ニーチェへと、近代ドイツ哲学における「主体」の概念史を講ずるというかたちでおこなわれた発表は、書物を通して彼の思想に触れていた私にとって非常に貴重なものであった。またここで Frank 教授は、F. シュレーゲルのテキストにみられる反フィヒテ的な「主体」観を例示し、初期ロマン主義者たちがフィヒテ哲学に傾倒していたという文学史の定説に対して再考するように迫ったのだが、この点について各方面から質問が繰り返され、活発な議論が展開された。

このように桑原教授と Frank 教授両者の発表は、ともに近代の主体を扱いながらも、西欧と東洋、ドイツと日本とのあいだ、さらには文学者と思想家における共通認識と微妙なずれをみごとに炙りだし、本学会の幕開けを飾るにふさわしいものであった。

その他ドイツ語圏、アジア圏の学者たちによる総勢 14 名の講演が 2 日間にわたっておこなわれたのだが、それらは二つに大別されるとみていいだろう。まずひとつには、ドイツ・ヨーロッパ文化圏とアジア文化圏とのあいだにおける主体のありかたの異同と、近代以降における相互間の「主体」観の受容を論じた比較研究である。マックス・ダウテンダイの文学における「私」と「彼」の揺らぎを論じた Barbara Potthast 教授や、リルケが仏陀のほほえみに「無我」の様態としての芸術表現の極致をみていたことを論じた Rosy Singh 教授などの講演がそのうちに挙げられよう。ふたつめには、18、19 世紀ドイツ語圏において、近代的主体とはどのようなものであったのか、あるいはどのようなものとして理解できるのだろうかという哲学的主題を、おもに文学テキストをよりどころにして論じたものである。とりわけホフマンを研究する私の関心を惹いたのが、Michael Mandelartz 教授の、「主体」と運動しながら変容した啓蒙期における視覚の問題を論じた „Ich bin, was ich phantasie.“ Vicos ‚verum et factum‘ und der Stand der Subjektivität bei E.T.A. Hoffmann “ という発表であった。また音楽の靈感が湧くさいの「自我」の様態について分析した Werner Keil 教授による „Das musikalische Genie – Subjekt oder Medium?“ という発表もひじ

ように印象深く残っている。人が音を聞くという純粹体験において、日常的経験が織りなされる場としての「主体」と「客体」の関係がいちど破られ、果てのない世界が開かれると同時に、その刹那の神秘において、あらゆるものの未分化の状態が世界を満たす。だが、このような体験はふたたび作曲家の思惟の加工によって分節化されなければ音楽とはならない。内在する自我の外在化という問題、これに関して Keil 氏は、ゲーテ、ジャン・パウル、ホフマンなどが書き残した同時代の作曲家モーツァルトやベートーベンに関するエッセイや音楽論を引用しつつ、文学と音楽を横断しながら、ロマン主義の主要概念である Genie を Einbildungskraft と比較しつつ論じた。

そして、学会 2 日目に私がおこなった „Das Spiel mit dem Wahnsinn und der Karneval des Ich. Zur literarischen Selbstreflexion im erzählerischen Werk E.T.A. Hoffmanns“ という発表もまた、後者に分類されるものだろう。私はまずこの発表において、ホフマンの日記が、舞踏や酩酊による自己解体への興味関心、ユーリア体験における内なる分裂と狂気、そしてこれらの自我の危機体験を芸術の高みへと昇華し、あらたな自己認識を求めようとする創作上の葛藤、という三つの柱に集約されることを確認したうえで、ホフマンの「私」観を明らかにし、文壇デビューの年から晩年にまでいたる彼の作品分析にあてはめようと試みた。とりわけ本発表で中心に論じたのは、ストーリーの難解さゆえにこれまで論じるのを躊躇っていた『ブランビラ王女』(1820)である。この作品におけるふたりの主人公ジッリオとジアチンタは、愛と踊りによって、互いに「私」の二重化と自己回帰を繰り返し、最終的に泉に映しだされた各々の鏡像を見ることで、他者を知ると同時に自己を知るという極致に達する。ここではフィヒテらドイツの思想家たちが生み出した近代的自我の神話とはまったく別の次元で、「私」にまつわる神話が完成されているのではないかと、私は発表をまとめた。

以上のような私の発表に対しては、Frank 教授と Mandelartz 教授を中心にして、自己省察、あるいは自己認識をおこなううえでの鏡像というモチーフをめぐる議論が展開した。鏡は啓蒙期においては想像力の戯れが表れる場であり、鏡像はむしろ自我の危機的状況を表現するモチーフとして用いられた。同じホフマンの作品である『大晦日の夜の椿事』(1815)を思いだしていただくと首肯されよう。しかし『ブランビラ王女』において鏡像は、むしろ認識の拠りどころとなる。自然と私が、鏡像を媒介にそれぞれの別の在りようを開示するとき、自我同一性を世界認識の根拠とする固定観念は突き動かされ、一元論を超越した総合的な視覚というものが生まれる。これもまた確かに西洋に伝統的に受け入れられていた世界認識のもうひとつの大きな流れである、という結論に質疑応答では至った。鏡像を媒介とした逆転的な自己認識をめぐるこの議論は、私には示唆に富んでいた。『ブランビラ王女』は、「私」にまつわる神話として西欧で語り継がれてきたナルキッソスの伝承、さらにはアダムとイヴの物語のモチーフを大筋において受容しながらも、最終的に大きくそれらを書き換えている。ふたりの主人公は泉のな

かにみずからを映すとき、自己認識にまつわるあらゆるしがらみから解放され、突然、笑いだす。西欧の精神世界の根幹にある自己認識と罪意識という、とりわけアダムとイヴの物語に源流を求められる主題は、18世紀以降の文学においておおきかたちを変えながら中心的モチーフとなる。この流れに『ブランビラ王女』も位置づけられるのではないか。このようにして今後取り組むべきあらたなテーマが浮かびあがってきたことは、私にとって大きな収穫であった。

さて、以上が、私のドイツにおけるはじめての国際学会の参加、そして発表だったのだが、連日、朝の9時から夜の7時にまでわたる刺激的な発表と、それにじゅうにぶんに応える濃厚な質疑応答の時間が続き、一日の終わりには憔悴しきってしまい、「我なし」の境地にまで達するかというような状態に陥っていた。このような精神状態が行動にも影響を及ぼしたのはいうまでもない。会場となったビーレフェルト大学は、1969年に創立され、1970年代にはヨーロッパ最大級の建造物として認められたキャンパスを有している。同行していた方が冗談交じりに話してくれたことを真に受けると、棟の横の長さにかけては現在でも世界一を誇っているらしい。初日にそれを耳にして戦慄した私は、ホテルから大学、そして会場となった ZiF まで、親切なスタッフの傍を片時も離れはしないぞと心に誓った。そのため、巨大な白い壁の塊であったキャンパス内へも、ましてやその背後に黒々と広がっているトイトブルクの森のなかへも、うかつに足を踏み入れなかった。しかし二日目のお昼ご飯が終わり、発表を控えていた私は、準備をしようとひとりで食堂をあとにした。そうしてしばらく迷っているあいだ、なぜかふと、行きがけの飛行機のなかで読んだ上田閑照の『私とはなにか』のなかで引用された山頭火の「どうしようもないわたしが歩いている」という歌を思い出したのだった。

我か人か、前後（というか東西南北）不覚者の私は、最後に打ち上げのパーティ会場まで送ってくださった Braungart 教授に、「どうして先生は常に精力的でいらっしゃるのですか」と尋ねた。すると先生は「毎日、自転車でも森のなかを通過して家と大学を往復しています。これも研究者であるためには大事なことですよ」と、トイトブルクの森を背景に笑顔をみせてくださった。

今回の国際学会での発表にあたり、広大なドイツの森を眼下に、そこへ一歩踏みだし、歩き始めるための勇気を与えてくださった新潟大学の桑原聡先生とビーレフェルト大学の Braungart 先生、そして私の拙い発表をいろいろな面から支えてくださったビーレフェルト大学のスタッフ、学会の参加者みなさまに心からの感謝を申し上げたい。

注記： 学会プログラムは以下のリンクから見ることができます。

http://www.uni-bielefeld.de//lilii/studium/faecher/literaturwissenschaft/download/Asien_Tagung_Flyer-neu.pdf

また桑原聡教授が会長を務めるアイヒェンドルフ協会の HP では、水守亜季氏による報告が掲載されています。

http://www.kyoto.zaq.nc.jp/dkccqf505/bielefeld_report.pdf